

アフロサマー&ワンコモッピー

梵葉豪豪豪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル出落ち短編。

0 0 0 0 0
5 4 3 2 1

目

次

16 13 11 6 1

「都都逸軍から派遣された、ラウラ・ボーデヴィイッヒ少佐である。年齢と階級が釣り合っていないのはクソが付くほど政治的かつ性的な理由だ気にするな。後私は織斑千冬の教え子だ。文句があるならかかつて来ればいい。寧ろ來い。弾の出る電動ノコ（喰え）で迎えてやろう」

全力で滑っているのはラウラも承知の上である。クラスの生徒らはどうしていいか判らない表情で固まっている。隣に立つ男性の仏（ほとけ）人シャルル・デュノア（偽名）と副担任・山田真耶（巨）は微妙に引いている。更に隣に立つスーパー担任・織斑千冬は何ボケを取りに行くか殴るぞ貪乳つて目で睨んでくる。

ここはニップ国ジャパンのIS学園。女性が股間とケツを晒して空飛ぶ世紀の珍兵器「IS」を学ぶ国立の高校である。ラウラはそこに1年生として編入された。軍から給料を貰っている社会人のラウラは何が悲しくて異国の学生をやれと命令されなきやならんのかそもそも今更ISについて習うことなんかないやん後自国の機体の機密保持どうすんの、という愚痴を飲み込み従つた。公僕はつらい。

学園の制服着た写真を送つてくるよう言われて腹立つたので嫌がらせにスカートの代わりに軍のボトムを履き自撮りして送つたラウラは悪くない。

ラウラはひとしきり教室を見廻して尋ねてみる。

「ところで教官の弟、織斑一夏はどこだ？」

クラスメイトが一斉にある一点を指差す。一番前の席だった。つまりところラウラと目と鼻の先である。

その男は顎に手を当て首を鳴らしていた。

「お前が……。いやまあそうなんだろうな」

どう見てもクラスで座っている生徒の中で男は一人しかいなかつたのだからそれはそうである。問題は見た目だ。

髪がアフロだった。それはもう立派な黒々しく。普通にしていれば普通にイケメンで通るフェイスを持つていながら、アフロである。

あまりに異質な存在についてラウラの主観がなかつたものとして視界から排除していたため発見が遅れてしまった。そのアフロマンは胡散臭い目つきを隠さずニヤけながらラウラを眺めている。

ラウラはドスドスと軍靴を踏みしめ一夏に歩み寄り、一発ビンタをかますために右腕を振り上げた。

「貴様なぞ認めんぞ！ 教官の恥部が！」

余談だが恥部、て部分にはクラスメイトが概ね同意できるところである。

ラウラの手が一夏の頬にヒットする直前、彼女の額に向けて一夏の手が突きつけられた。予想外のリアクションにラウラがぎよつとして硬直してしまう。

手にしているのは拳銃だつた。腰や懷に手を廻した様子が全くなく、突然現れたのだ。

「わははははは！」

一夏は空いた方の指を額に付け、実に胡散臭い目つきのままラウラに向かつて語る。

「コイツが撃つワケない、思つてるよね、そう思つてるよね？ オモチャの銃なのかもしね、人撃つたこともないドヘタレかもしねない。こんなこと言いつつ内心ビックビクしてるかもしねないなあ！」

ラウラがもういかんこいつ殴ろうと考えた瞬間、

「俺は撃つけどね」

彼は躊躇無くトリガーを引き、特有の乾いた発射音がクラスに響いた。

その言葉と同時にラウラが銃身の横つ一面を叩き、頭を反対方向に傾けたために直撃を避けられた。明後日の方に飛んだ銃弾は黒板にめり込んだ。

「本当に撃つ奴があるか！」

ラウラが激高して叫んだ直後、背後から誰かから胸にしがみつかれた。振りほどこうと思う間もなく、

「何ッ!?」

「わおーん！」

バツクドロップを仕掛けられた。しかも微妙に飛んでる。女生徒のスカートの中身が一夏には見えているが、まあどうでもいいことだろう。

ラウラが両手を床に着いて頭がヒットするのを防ぐ。そのまま後転し、立つたと同時に自分も拳銃を構えた。両手で構えるちゃんとしたり方である。

「貴様ら!?」

ラウラ vs アフロ一夏&投げ飛ばした女生徒という対決の構図が出来上がった。お互いに拳銃を構えて一触即発の状態にある。周囲は妙に静かに見守っていた。ビビってるとも言う。

「ハツハーア！」

「ぐるるるる」

ラウラには目の前の女生徒について思い当たる節があった。ISを発明した篠ノ之東の妹、篠ノ之箒である。主に人質としての価値として各国に認識されている。しかし、ギザ歯を剥き出しにして犬のように唸る微妙に人間辞めてる変態だとは調査報告書には書かれていなかつた。

誰が好き好んで変態の巣窟に通わなければならんのだとラウラは嫌気が差しもう本気で撃つちゃつていいんじゃないかという気分にまでスライドした。

「いい加減やめろお前ら！」

流石に千冬が止めに入つた。行動が遅れたと言えば遅れたのであるが、ほんの10数秒の出来事だつたのだ。兵士の癖というか、ラウラは何も考えずに指示に従い銃を下ろした。一方のアフロ野郎も肩を竦めて従つた。クラスに流れた雰囲気は、いわば厭戦気分という奴だつた。

後にラウラが聞いた話では、彼は同じクラスの英吉利人セシリリア・オルコットを始め幾人かの女生徒に突つかかられる度に撃つていたらしい。笑いながら。弾が当たつた人もいるという。

「あの……一夏さん？ 訊いてもいい？」

その夜の学生寮、その一室にシャルルはいた。二人部屋が原則のため、同じ男子同士という理由で今日から一夏と同室になつてゐる。その一夏に質問をぶつけたのだ。

「あー、悪い悪いこの格好は刺激的かい？」

下着姿の一夏がソファにくつろぎつつ応える。小癪なことに黒いブーメランパンツを穿いている。そんなボディに頭はアフロで。世の中の寮生がパンツ一丁で部屋中ぶらつかなぞ男女問わず珍しくもない。全裸よりマシだろう。

「いやそれだけじゃなくてね……。ここ二人部屋だよね？　何でこの人が？」

シャルルが指した先のベッドには、篝がうつ伏せになつてくつろいでいた。同様に下着姿である。彼女はシャルルをガン無視している。「いやー君が来る前は篝と一人部屋だつたんだよね。でもヤだつつたのに結局駄目だつたから泊まり込んでんだわ篝」

「あーうん、それは大変だね……」

いいワケないじやないかと言いたくなつたが、上からは一夏のISのデータを盗めと命令されているので、この場は長い物に巻かれるというかとりあえず仲良くしておこうと算段した。自身のアイデンティティが音を立ててゴリゴリ削られている気分だ。

「どころでさ」

「うん？」

一夏が凄くアツケラ・カーンとシャルルに提案をする。

「脱ごうか」

「は……ハアッ!?」

サラシで無理矢理隠した胸を守りつつシャルが全力で後ずさりした。

ところでシャルルは男装した女性である。上からやれと言われてやつてるだけだが、そんな彼女に代表候補生という公的な地位を与えるというお仏蘭西の自殺行為に付き合わされるシャルロット（本名）としては溜まつたものではない。バレたらサヨウナラ。

「いやいやイヤイヤ！　僕そういうのは！」

へたり込んで後ずさるシャルロット。一夏と篠が笑顔を湛えながらゆつくりとにじり寄つて来る。下着姿で。

「さあ女は度胸！　快樂の世界へようこそ！」

「がう！」

「ななな、いや僕男……」

さらつと正体がバラされて狼狽するシャルロット。何かの間違いだと思いたい。一夏は笑顔でフォローを取つた。

「ドーテージやあるまいし女の体くらい見りや判るわな」

誰で捨てたかはこの際知つたことではない。一見してバレているのであればもうどうしようもない。遂にシャルロットはその場で泣き出した。

「あーそーかミカンツーか、悪かつたな」

罰が悪くなつた一夏ではあるが、世の中言い方という物がある。

「う、うん……」

改めてソファーに座り直し正対する3人。気まずい雰囲気が流れている。

「雰囲気作りは大切だよな。で、まずコレをな」

冷蔵庫から戻つてきた一夏がテーブルにズドドンと置いたのは、缶ビールと、ジャパンのモルトウイスキーの瓶である。ウイスキーを冷蔵庫に仕舞つっていたのは単に寮長の目から隠すためだ。

「あーそう来るんだ……」

シャルロットはもうどうにでもな一れーと色々放り投げた。胡散臭いアフロの笑顔とケモケモしいジャパンガールの飲みたそうな眼を目の当たりにして、もう何でもいいじゃないかとなつた。

この夜、シャルルならぬシャルロット・デュノアはロスト・バー以下略した。後の祭りである。

「ああ、一夏、一夏ね。あのアフロね、剃つても二日で生えてくるのよ。昔担任の先生が朝バリカンでガ——つと丸刈りにしてね、でも1時間目終わる頃には目に見えて黒々生えてきたワケよ。それはもうモツシヤモシヤと。先生も意地だつたのね、毎日1週間剃り続けて。ま、先生結局折れちやつたけど」

「誰が奴のヘアスタイルの話を聞いたか」

都都逸国が今経済面で絶賛d i sり中のチュー力カ力國で代表候補性やつてる2組の凰鈴音へ一夏に関する情報を問い合わせしたラウラは、速攻で己の愚を悟つた。駄目だコイツサカツつてやがる。

何かを思い出しグネつている鈴音を放つておいてラウラはさっさとこの場を去ることにした。

「あと一夏のきのこが」

「知るか」

「織斑一夏、私と勝負しろ」

とラウラが高らかに宣言したその場所は、放課後バト以下略のアリーナ。自主練習している生徒でごつた返している。当然皆がやることはISの練習である。かく言うラウラもISを装着して中空に浮かんでいるところだ。

睨み付けて指差した先には一夏らクラスメイト御一行がたむろしていた。軍人が素人に喧嘩を売るという大人気ない構図には当のラウラ本人は気付いていない。大人ではないが。

当然ながら一夏もISを着込んでいた。クツソ白いISはラウラと同じように国から貸し出された専用機である。そんな白さに黒々としたアフロヘッドが刺さつてるのはぶつちやけアンバランスとか言いようがない。更にお前は千九百何十年代だってばかりの巨大なサングラスを掛けている。

ついでにその隣には赤いISを着込んだ篠がしゃがんでわんこ座りしていた。ISつてしまがめるんだねビックリした。どうでもいい

いのでとりあえずラウラは彼女を無視した。

ご指名の一夏は両手を拡げ満面の笑みを湛えながら寛大に迎えた。実際に余裕である。

「ワーオ、ワタクシ愛する教官とにゅあんにゅうああんシタイので邪魔な弟は排除しまーすってか？ 素晴らしい蜜濡れの師弟愛だ！ マンガかラノベかw e b 小説みたいだ！ オツケーいいぜ受けようか

「お前は殺されたいのか」

あからさまに怒らせる気マンマンで挑発する彼の態度に怒りでつい乗つてしまふラウラである。肩に装備したとでかい砲「レールカノン」を一夏に向けた。ラウラの着ているISが軍用で当然軍用の装備なのでこういう場では些かオーバーキルとは言える。

対する一夏は右手にIS用の拳銃一丁構えているだけだった。IS用といつてもグリップがちよつと延長された程度の、本体は至つて普通の9mm拳銃である。そんなものがISに効くのか？ という疑問をラウラが抱いたのは当然であろう。

周囲のクラスメイトは一夏のスタイルを見慣れているので特に動搖がなかつた。寧ろラウラに対し可哀想に明日はさくらユッケのために解体される競走馬的な目線を向けている。そんな連中にイラッとしたがラウラは等同様に無視した。

スタイルシユなポーズを決めつつラウラのいる高度まで登つて来る一夏。同じ目線に至つた瞬間、問答無用でラウラは「レールカノン」をぶつ放した。

大味な武器だし当たるとは思つていなかつたが、おどけてグネりつつもきつちり避ける一夏に、果たしてマグレなのかはラウラには判断が付かなかつた。

逃げる一夏を追つて右方向へ横一直線に連射した。バレリーナの如きスタイルで高速にひよーひよーと銃弾を避けていく一夏。人をナメくさつた態度でありつつきつちり避ける辺り流石に彼がキヤリア数か月の素人だという評には疑問を抱かざるを得ない。

一夏はデタラメな軌道を描き、ラウラが廻り込むよりも先に彼女の

後方へと陣取つた。

「ハイハイハイハイ耳の穴！」

ラウラが振り返ること見越して、一夏は軽やかにといふか軽薄に一発撃つた。振り返る途中にあつたラウラの左耳に絶妙なタイミングで銃弾を捻じ込んだ。

生身の露出した部分も含めてバリアが守つてくれるIS様なので、異物が奥に通らないよう止めてくれる仕様ではある。しかし微妙に耳穴にジャストフィットする口径の弾だつたのが実に嫌らしいところで、ラウラの耳穴に軽減された衝撃を伴いピツタリ納まつてしまつた。慌てて熱いコイツをISの指でほじくり返したラウラだつた。結果的に怒りが余計増しただけである。

「ふざけてんのか貴様！」

怒鳴つてはみたものの、この場は余計隙を生じさせただけだつた。

「ハイハイハイハイ上の穴！」

「ぬぐつ！」

今度はラウラの口の中である。同様に止まつてくれたのでペツと吐き出す程度で済んだ。どうでもよろしいことだが飛行中のISが飛んできた鳥を咥えてしまふ事例はたまにある。という本気でどうでもいいことをラウラは思い出した。もうここまで来たら奴の腕は認めざるを得ない。

「もういかん貴様は死ね！」

両手からワイヤーに繋がれたナイフをせり出し、更に相手の動きを止める「停止結界」を発動させてきつちり刺し殺してやろうと構えた。が、相手が馬鹿正直に待つてくれる道理はなかつた。

「ハイハイハイハイけつの穴！」

「オヒヨーウ！」

ちよつと入っちゃいけないところへ銃弾がめり込んだ。しかも2発目の銃弾が正確に1発目を叩いて後押しし、ISスースの生地もろとも微妙に深いところまでズカーンと行つてしまつている。ついでに述べるなら撃たれた銃弾はグネリつつ回転しているものである。「絶対防御」とのギリギリせめぎ合いだつた。

その時のラウラは、およそ井上〇里奈らしからぬ声色を発し、詳細に描くのははばかられたい表情になつていて。敢えて述べるなら、ラノベの表紙や挿絵を飾るクール系美少女から白〇由竹への変化である。合掌。

硬直した敵をアフロ野郎が見逃す筈もなかつた。

「ハイハイハイハイ下のあぬごお!?」

取り返しがつかなくなる直前、一夏の眼前に束ねて捩つた髪の毛2束が突然襲い、彼は物凄い力ではたき落とされた。そんなに高くないう高度だつたのでコンクリをちよつと損壊させた程度で済んだ。生身だと死ぬ。ついでにラウラも巻き添えを食らつて墜落した。周囲の目も墜落を追い揃つて視線を落としていく。

「ばばう！」

伸びた髪の毛の元、腰に手を当てたポーズの箒が落ちた先の一夏に向かつてギザ歯を剥き出しに咆えた。傍目に見ても怒つてらつしやる。

一連の騒動を腕組みして眺めていた同じ1組の谷本癒子、鷹月静寐、四十院神楽の3名は思い思いに感慨深く眺めていた。他人事である。

「うんまあそー来るよね。下品だつたし」

「あの髪つてISなのか生身であんなのか」

「いつからここは富沢ひとしワールドになられたのでしょうか？」

どちらかというと箒の話にシフトしてしまつていた。今に至るまで日本語を喋つてゐるところを見たことのない級友の方が関心度は高い。彼女らから見ればどうやつて現代日本を生き抜いてきたのか謎の女子である。髪の毛ドリルとか、政府の陰謀で共生でもしたのかと勘ぐりたくもなる。

凝りずにシャキンと立ち上がつた一夏は拳銃をラウラに向けて構えた。スタイルリッシュに拳銃は横向きで持つ。空いた手で手招きのゼスチャーを取つて挑発してきた辺り本当に懲りていない。ラウラも立ち上がりて各種武器を一夏に向け対峙する。小刻みに震えながらも尻を押さえ果敢に挑む姿に周囲は色んな意味で涙し畏敬の念を

抱いた。

「ボーデ何とかさんよオ、それでは本番行つてみよーか！ 今度は弾丸に『零落白夜』つてるよ！ バリアズブズブだぜ！」

本番の好きな一夏が更に煽る。

「零落白夜」とは一夏のISに備わった能力であり、相手のエネルギーーやバリアをガン消しして剣撃を叩き込むIS委員会よくそれOKしたなつて代物である。現役時代の千冬が最初にこれを使つていたので、ある意味継承したようなものと言える。だがあくまで一夏のISに標準装備されている剣での話だ。

それはそれとしてつまるところ一夏はバリアを突き抜けて本体や生身を撃ち抜けるとそう言つている。

「何で応用するんだ！ 教官の必殺ブランドをそんなえげつないことに使うな！」

本人にとつて至極当然の言い分をラウラが放つが、ニヤケ面を隠さない一夏に効きはしない。

「そこの二人！ そこまでだ！」

たまたまアリーナを見回りに来ていた大千冬先生が見かねて止めに入つた。周囲はとりあえず収まつたと一斉にため息をつく。

「……私闘とまでは言わんが物には限度というものがある。トーナメントまではお前ら対決は自重しろ」

ニヤつき顔のまま肩を竦めたグラサンアフロ野郎は掲げた拳銃を目の前から消した。「量子化」というIS特有の機能で武器が収納できるのだ。しかし一夏のISには専用の剣以外収納できない。整備畠の女生徒たちには色んな意味で納得し難い話である。

張り詰めていたものが切れ、遂にラウラが倒れた。ISを装着している見物人らにより緊急搬送される。あなたはアイツ相手に痛みに耐えてよく頑張った感動した可愛い、と彼女が多くの中生徒からちよつと見直された小事件であつた。一方の一夏の評判は聞くまでもなかろう。

ラウラは死んだ！ ギヤラクティカ！

……というワケではなかつたが、生憎と彼女の周囲は真つ暗で、自身は浮遊体験ばかりに浮かんでいる。ちなみに全裸である。

何故こうなつたか。先程まで学園行事のタッグ・トーナメントにて一夏・篝ペアと殺り合つていた。自分のパートナーは忘れた。

結果的に、一夏の「零落白夜」付き銃弾でバリアを突き抜けボコボコに撃たれまくしてダウンしたラウラである。「絶対防御」が発動して守つてはくれていたが、肉や内臓に食い込んで控えめに言つて痛い目に遭つた。ついでに弾は不定形に潰れて体内に残る対超鋼炸裂形態！ と化して「絶対防御」の膜ともども体内に残り、ぶつちやけ死ぬ程痛い。

ぶつ倒れて全負けした直後に肉体が黒い何かで覆われて勝手に暴れたのをラウラは上述の空間から見ていた。本国で散々問題視された自動化システムがISに無断で搭載されていた故の暴走なのだが、この時点のラウラには知る由もない。

唐突に遠くから何かが踊りながら現れた。男である。

「V！ T！ システエエエム！」

キレイッキレのポーズを決めながら前口上を叫ぶマツチヨ野郎は、眩しい程に目を光らせながらラウラの目前に陣取つた。

「私は羽〇野チカ（うみのせんりき）！ VTシステムの核であり甘酸っぱい青春のせつなさを伝える愛の伝道師！ お前は我がシステムに取り込まれたのだ！」

甘酸っぱさから全力で遠い濃ゆい絵柄のオッサンの登場に、ラウラは文字通りドン引きした。ローアングルで立ちはだかられて無駄に迫力がある。

「おい、せつなさはどうでもいい。とつとと私をここから開放しろ」

これがヤーパンサブカル大好き副官クラリッサ・ハルフォーフ大尉じゅうはつさいならば、ハチミツホーリー隊員だREDの切り抜き永久保存だイヤツホウ！ とばかりに長々と解説してくれるのである

が、いないのでラウラは知らん。なのでただ指差して要求を突き付けるのみだ。全裸だが。

「何をハチミツスウイーツなことを！ 無理に！ 決まつておる！」

両の手でズビシツとラウラを指差すその態度も相まってイラツト来るラウラ。人生において他人に殺意を抱いたのは例のアフロと枕を打診した将校とコイツで3人目である。

「さあお前はここで！ お前の歩んだ青春のせつなさアーンド届かぬ思いに身を焦がして！ 死ぬのだ！」

「こちどら研究所と軍隊生活で青春も何もないわボケエ！ ……ああ待て畜生……！」

せんりきにより脳内に無理矢理引き出されたのは、ラウラ自身が歩んだ半生だつた。施術に失敗して落ちこぼれ扱いされた悔しさに絶望、千冬に見出された希望と羨望、部隊員やクラスメイトとのガールズトークに混じれない寂しさ、そして千冬への届かぬ思いが放水したダムの如くラウラに雪崩れ込み、ままならぬ人生に押し潰されまくり頭を抱えてのけぞり返つた。しつこいが全裸である。

「あア……井上エエエエエ！」

「フハハハお前はここで寂しくのたれ死んでいくのだおねツイイイイイインズ!?」

高笑いするせん（略）が突然背後から無茶苦茶に撃たれまくり、頭と胴体を何10発か貫通された後、眼の光が消え前のめりにブツ倒れ、大量に血を垂れ流しほつくり絶命した。

「いよウラウラちゃん」

下手人は一夏だつた。馴染みの焼鳥屋にぶらつと寄つた酔っ払いの如き気安さで、拳銃を持った手を振つて現れた。言うまでもないが彼も全裸である。

「どうやつて入つた」

「黒いのに触れたらよオ、入れちまつた」

あつちの世界の中でつづく。

暗転し、今度は映画館の一室となつた。中央近辺のちょっと上辺りにて二人は隣り合つて座つている。今度はちゃんと二人とも制服を着てるので安心して欲しい。

これがヤーパンサブカル大好き副官クラリツサ・ハルフォーフ大尉じゅうななさいならば、アニメお約束の心の描写！ とばかり具体例を次々列挙してくれるのだが、ラウラに知る術はない。助けてもらつたこともありともかく付き合うしかない状況にある。

スクリーンにはカウントが映され、いかにもとばかりに映画が上映されようとしていた。

「これは貴様の半生記とやらか」

「イエス、刺激的なモノが見れるぜ」

「この際だ見てやろう」

そう言いつつラウラはカップを抱えて中のポップコーンを齧りつつスクリーンに見入ることにした。当面この空間から出られそうにないから暇なのだ。

どこかの乱雑なラボに立つのは、二人の子供、一夏と筈である。この頃はまだ見た目はまともであつた。

テーブルに置いてあつた物をお菓子だと勘違いした二人はそれを飲み込んでしまつた。直後全身から何かが溢れファイティングポーズを取る。10代の頃の篠ノ之東が泡を食つて駆け寄つて来るが手遅れの様子だ。

その後の彼らは、現在のような出で立ちに変化し、拳銃やドリルが生えたり、いじめっ子を吹き飛ばしたり、襲い掛かる政府のエージェントを屍の山（比喩表現）にしたり、遂には白騎士事件のとばつ切りで離散させられたり、爆散して自己再生したり、エイリアンと握手したりの半生だつた。

「つまり何だ、ISコアつてのは元がエイリアンであつて、お前はそのISコアと共生してIS人間になつたと」

「ハイ正解」

映像から読み取れる情報だとそういうことになる。聞きたくなかったISと彼らの秘密だつた。無事生還の暁にはこれらを本国へ報告しなければならないラウラである。実に気が滅入る。

そのひ、おりむらちふゆをおしたおした。

「ブ————！」

口内に含んだポップコーンを盛大に飛ばしたラウラは、狼狽して一夏の胸を捻り上げ突っ込む。

「お前何考えてる!? 実の姉だぞ!?

「姉弟同士つてな、背徳感あると思わねえか? いや俺当時はマジだつたからな?」

「最低だ」

敬愛する教官の絶対知りたくなかつた過去である。その後の千冬の満更でもない態度から、ラウラの中で燃えていた千冬熱に冷や水をぶつかけられた。あーこの人も一人の女だつたんだな、と。

そのひ、ふあんりんいんをおしたおした。

「ああうん、教官相手よりはまあマシだ」

「これは年相応というものさ」

「ジュニアハイスクール時代という点を除けばな」

山本直樹作品ばりなプレイ三昧を見せられてもラウラにそういう趣味はない。スカシ目を湛え機械的にポップコーンを齧る作業に入り、ついでにコーラで喉を潤した。

そのひ、ごたんだんをおしたおした。

「オイオイ思わず俺たちの友情に感動しちまつたのかい?」

「……そう見えるか?」

ラウラが思わず目頭を揉み解した。3度目は大体オチである。世の中に蔓延るクソ映画とはこういうもののなのだろうとラウラは勉強になつた。それでも思わないとやつてられない。

クライマックスにはISを動かし実技試験で無双し試験会場を吹き飛ばし、筈と再会して濡れ場に突入しエンドとなつた。丁度ポップコーンが切れたのでカップを仰いで残つた内容物を口に含み、コーラで喉を洗い流す。武〇人間を観た方がまだマシだつたとラウラは結

論付けた。

「とりあえずはお前がろくでもない人間というかクソ野郎というのは判つた」

「何て人聞きの悪い。俺、愛の戦士だよ？ 銃使いを卑怯と言い放つて弱くて守る守る詐欺でヒロインたちに嫌われるワンサマちゃんだよ」

「どこの時空の話だ心にもないこと言うな」

アニメ顔の描かれたお面を顔に貼り付けのたまう一夏をとりあえずラウラは一蹴する。

「ラウラちゃんよオ、俺のベッドにいつでも潜り込んでいいんだぜ？」

全裸で

「私にそんな人生の選択肢は今の所ないから安心しろ。あつても貴様にではない」

本気で嫌そうな顔をしてラウラは二度目の一蹴をシユートした。この映画館でのここまでに至る経緯はその殺し文句で締めるための振りだったのだが、好感度がマイナス振り切っていては実に無意味なものである。

その後黒い塊を突き破つてアリーナへと復帰した一夏とラウラは、黒々しい何か筋肉男的な残骸をボコボコに撃つたり斬つたりして徹底的に消した。

最後に千冬がいかにも恋人らしく軽く一夏の尻を叩く様を目撃し、以降ラウラは真面目に生きようと決心した。

尚一夏は直後箒に尻を噛み付かれた。

現在、ラウラは未だに一夏に狙われている。

「ラウラちゃん、それダメダメ、こつちで！」

と、クラスメイトの鷹月静寐がラウラに手招きする。その手には水着がぶら下がっていた。というか紐。

ここは都内、というか I.S 学園に近いウォーターフロントにあるショッピングモール。埋立地の遙か先に建てるとか大阪の某モール並に正氣かお前と呼ばれたアレでナニな立地だが近場のラウラ達はどうでもいい。

そのカジュアルな女性服売り場でラウラ始めとする 3 名が寄り集まっている。今度実施される臨海学校に向けて水着を調達に来たのだ。女だらけのクツソサバい学校の行事で誰に見せる水着だという夢のないことは語らない。

そんなワケでラウラと鷹月さん、シャルル改二シャルロットの 3 名が水着選びにあーだこーだしている。

シャルル改めシャルロット。要は女だと開き直って女の制服に着替えて本名名乗つて再編入したあの人である。白人美少年に喜んで濡らした数多くの女子に謝つて欲しい。

尚ラウラは軍への定期報告に「仏蘭西の代表候補性は織斑一夏の力キタレになりました（意訳）」と正直に書いて送ったことをこれっぽっちもおくびに出さず接している。本国がこのカードを仲の悪い隣国相手にどう切ろうと知つたことではない。

本来はここに箒も来る予定で誘つてはいたのだが、現在教員たちが彼女に言葉とモラルを覚えさせようと奮闘しているので公共の場に連れ出すのは憚られた。ついでに彼女のギザ歯に差し歯を着けさせるかどうかで揉めているという。

それはそれとして、鷹月さんがラウラに両手を掲げて見せびらかしたのは、局部を隠す僅かな布同士を V 字に展開された紐で繋がれた、一応カテゴリーとして水着と称される代物である。名称をスリングショット。エロいファイギュアか変態男のプレイ位でしか見ない奴だ。

「……待ってくれ、海水浴でポールダンスやらせる気か!?」

「ほうほうこれはハードル高いですかあ」

「いや普通そだろう!?」

ラウラがこれ以上見ない姿で狼狽するのは必然であろう。必死に手を振る。その手には紺色のスクール水着が握られていた。顎に手を当て、ニヤリとした表情で目を光らせた鷹月ＳＵＮが、即別の水着の掛けたハンガーを掲げる。

「じゃこちらで！」

「うん、まあそうだなアレよりマシか。そちらにしよう」

今度は和服風の水着である。極端に短いつんつてんで胸は局部の隠れた前開き、ローライズなセパレートの下はもう出しルックだ。商品名を「どろろルック」。先に提示された水着より露出が低いのでラウラはつい安心して選んでしまった。先に極端な物を提示して後に本命を選ばせるという鷹月さんの罠である。ラウラは恨むなら自身の体型を恨むが良い。

「そういうやさあ」

「何だ」

速攻で会計に持つて行かれつつ、鷹月さんの問いかけにラウラが首を撫る。同時にシャルロットもレジに水着を運んでいた。ブツはでかい。

「ラウラちゃん現役の軍人だから、生徒はＩＳをファッションド勘違いしてるー弛んでるーとか言つて眉顰めると思つてたよ」

その間に、ラウラは得心する。民間からの軍人への先入観としてはあり得る話だつたからだ。

「そもそもあそこは競技としてのＩＳのノウハウを学ぶ場だ。軍人の心得は軍隊で教えるものだ。……寧ろ自分が場違いという自覚はあるぞ」

「まー戦車道やつてる人に軍人としてのウンタラ言つちやうようなもんだしねえ」

「何だそりやはは」

レジのお姉さんが微妙に聞き耳を立てていた件についてラウラは流した。今をときめくＩＳ学園の生徒だと勘ぐられたワケだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ちょっとそここのアナタ！ 何度も言わせる気？ アナタが払いなさいって言つてるのよ！ は！ ら！ う！」

3人が店舗を出た直後に、いかにもど神経質でねちっこいオバンの叫び声が響いた。

ラウラたちがその方を見ると、別のレジにて金切り声を上げるオーバー・サーンとそれをニヤニヤしつつ受け流している男子がいた。周囲も何事かと注目している。

鷹月さんが覗き込む一方、ラウラはうんざりしてしまった。

「何何？」

「選りに選つてあいつかー……」

選りに選つての男子は、一夏・ザ・アフロ野郎だった。自分が選んだ服を彼に払わせようという腹積もりらしい。アフロを頭に抱く65536%怪しい男に喧嘩を売れるその女は胆力があるのか人を見る目が壊滅的な馬鹿なのか。後者だろうとラウラは見立てた。

「一夏……！」

「関わるな」

シャルロットが一夏に助け舟を出そうとしたところをラウラが遮つた。彼女が軽く腕を振るつているが、その腕はシャルロットには容易にどかせそうもない。

「まあ私らに何ができるつて訳でも、ねえ？」

「酷くない？」

「奴なら自力で何とかするだろう」

鷹月さんが首をすくめ、シャルロットが突っ込み、ラウラがフオローを入れる。ラウラの判断に個人的感情がないとは言わない。

「それでよオキンキンオバチヤン、アンタ自身は強えのかい？」

「何言つてるのよ！ 今時男なんかより女が強いに決まってるでしょ？」

「そんなマスコミ様のアジジやなくてよ、お前はどうかつて聞いてん

だよ?」

一夏の漂々とした問いに、件のオバチヤンは苦み切つた顔をする。話の内容よりも、やり返されることを想定してなかつたのだ。それでも彼女が返したのは、本人の矮小なプライドと、目の前のアフロメンが口を吊り上げたいかにも邪悪な表情に当てられたからもある。

「そんなの……決まつてるでしょ!」

「あ、そ、うん、強いね?」

表情を変えずに一夏が手を何でもないように掲げる。いつの間にか0・45口径の銀光りする拳銃が握られていた。種を明かせばIS人間だからISの機能である量子変換で銃を召喚した……というものであるが、知らん人にそんなこと判る訳もない。ついでに野次馬も騒ぎだして無駄に混乱を起こした。

「ひつ!」

オバチヤンの悲鳴を他所に、銃床から弾倉を引き抜いて弾数を確認する。スライドに入つた分を含めても8発しか納まつていない。8発しかないと述べるべきか8発もあると述べるべきかは微妙なところである。このカツクイイ拳銃AMTハーボーラーは映画で某マッヂョな殺し屋ロボとか某スキンヘッドの殺し屋が愛用していた得物であることはまあ覚えておいて損はなかろう。

「ほい」

そんな拳銃を一夏が手の中で回転させて銃身を握り返し、グリップをオバチヤンに見せた。

「強いんだろ? 僕を倒して証明してみせてくれよ。ホラ」

そんなこと迫られても命のやり取りまでしたことのないオバチヤンは困る。だがどうせ拳銃は偽物だろうと踏んで震えながらも拳銃を奪い取る。だがずつしりとしたステンレスの重みに、これは本物ではないかという疑いが強くなり、目に見えてオバチヤンの手の震えが強くなつていく。

「流石にマズくない? 止めようよ?」

何ぼ何でもな事態にシャルロットが飛び出そうとするが、ラウラに腕をがつしりと掴まれ動けない。一夏の奇行を他のクラスメイト程

目にしている彼女にとつては彼のピンチである。

「お前らを巻き込む訳にいかん、ここは抑えてくれ」

「いいのかなあ……」

何もしない方がマシという言葉もある。それはもうスカシ目全開なラウラの表情に気後れし、シャルロットは引っ込むしかなかつた。突然というか遂に、発砲音が響いた。

オバチャーンの撃つた銃弾は見事にアフロ野郎にヒットした。ではあるが、彼の派手にぶつ倒れる様がすげえ演技くせえとラウラはどうでもいいことに呆れるだけだつた。

「キヤアアアアアアア！」

今度はあらゆる方向に出鱈目に撃ちまくつてきた。ラウラは即二人の頭を抑えてその場で伏せさせた。周囲の野次馬や店員も慌ててその場に伏せる。明らかにオバチャーンが意図して狙つて撃つてる風ではない。方々に着弾し大惨事と化す。

残り7発全部撃ち切つてスライドが後退したままになつた拳銃に対し、それでもトリガーを引き続けるオバチャーンは控えめに見ても錯乱している方だろう。

オバチャーンが全弾撃ち尽くしたのを確認したラウラは速攻で立ち上がり、未だに喚くオバチャーンの背後に廻つて腕を捩り上げた。同時に拳銃を取り上げ、更に対象を床に伏せさせる。現役軍人として鍛えられた体の成せる業だ。

「確保！ 警備員さん！」

ラウラの叫びとともに、しゃがんでいた男女の警備員さん二名がはつとした直後すつ飛んできた。ラウラから引き継いで対象を拘束する。暴れるオバチャーンを二人して何とか引き摺つていき、あつと言ふ間にその場は沈静化された。

後にこのオバチャーンが警察にて「手が勝手に動いて撃つた」とほざいていたが信じる者は誰もいなかつた。

「一夏！ 一夏！」

「君！ 落ち着いて！」

眠れるアフロくんの傍らに、シャルロットが錯乱氣味に彼の体を搖

する。3人目の警備員が何とか止めようとしているが難しい。一夏の胸のど真ん中に穴が空いて彼の黒いワイシャツを血で汚して、ピツクリとも動かない。彼女だって錯乱もするというものだろう。尚鷹月さんは背後で真っ青になつて突つ立つている。

スカシ目になつたラウラは首を鳴らしながら近付いた。

「あー警備員さん、この人なら多分大丈夫ですよ? 後シャルは安易に揺するな」

「はい?」

「うん?」

警備員とシャルロットは放たれた言葉の意味を咀嚼するのに時間がかかるてしまい、ちょっと固まつた。

「おい」

全く躊躇することなくラウラは一夏の脇腹を思いつきり踏んづけた。レバー直撃は痛い。一瞬股間をターゲットにしようと思つたが、後々面倒なのでやめた。

「あーいってえ」

普通に一夏が半身を起こしてきた。思わずのけぞるシャルロット・警備員・鷹月さん御三方。

「な?」

「一夏! 一夏!」

「あの君、大丈夫なのか?」

シャルロットは泣き顔でアフロ君に縋りつき、警備員は心配で声を掛ける他所で、なじやねーつて突つ込みたい気持ちを鷹月さんは呑み込んだ。

「弾ちゃんは内臓避けてくれたぜ。いつてえんだけどな!」

「そういうことにしておこう」

一夏の説明をラウラは聞き流した。以前見せられた半生で上半身が爆散後自己再生したこの男のクソしぶとさを見せられているだけに、一発撃たれた位で死ぬワケがないと合理的に判断した上での一連の行動だつた。後銃弾はそのうち吐き出す。

「酷いもの見てしまつた」

「まあ同感だ」

ボヤく鷹月さんの肩をそつと叩いたラウラが心底嫌そうに呟いた。
この嫌な気分を共有したい。唐突にタン○・ガールでも観て癒された
くなつた。

「ところで俺の拳銃どこ行つた?」

「さつきあそここの警備員さんが持つてつたぞ。丁重に。証拠品だ」

「何てこつた、アレお気に入りなのに! 帰つてこねえ!」

「何10丁の内の1丁位別にいいだろうが。後警察に怒られる」

判つててさつさとブツを渡したのがラウラだ。

ちなみに一夏を取り調べた警察の人の第一声が「またお前か!」
だつたのはご愛敬である。愛嬌で済ませていい話じやない。

さしあたつて、一夏が肩を竦めて手を掲げボディを傾けたポーズで
更に笑みを称えつつおどけてみせる。シャルロットが腰に抱きつい
ていなければもうちょっと格好は付いただろう。

「酷い損失だ」

「物事をでかくしたお前は眞面目に反省しろ」

「オーウ何てどストライクに突っ込んでくれる。まあ何だ、カツコ悪
いとこ見せちまつたな」

などとアフロ野郎は爽やかに応えた。人によつては邪悪な笑みに
見える。

「このクソ惨事をカツコ悪いの一言で済ます貴様はろくでもなさすぎ
る」

実にスカシ目でラウラは吐き捨てた。

尚周囲は事件のショックが尾を引いておりざわつきが収まらない。
更に胸から血糊吐き出しながら平然と立つてついでに金髪女が抱き
ついているアフロメンに興味津々である。嫌な構図だと突つ込みた
い鷹月さんの気持ちは誰も察してくれない。

それはそれとして一夏が手持ちの紙袋に手を突つ込む。ラウラか
らは紐状の何かが見えた。

「ところで俺のスゲエセクシイな水着を見てくれ」

「嫌だ」